第１回 デフスポーツ推進室会議 議事要旨

１　開催日時

2026 年 10 月 6 日（火曜日）13：00～14：10

２　開催場所

戸山サンライズ２階 大研修室Ｂ

３　構成員等

〇委員（構成員）

久松 三二（一般財団法人全日本ろうあ連盟アドバイザー）
石原 保志（国立大学法人筑波技術大学学長）
太田 陽介（一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会委員長）※欠席
大日方 邦子（パラリンピアン/公益財団法人日本パラスポーツ協会理事）
亀澤 理穂（デフアスリート）
蒲原 基通(日本社会事業大学理事長）※欠席
河合 純一（スポーツ庁長官）
河原 雅浩（一般財団法人全日本ろうあ連盟副理事長）
平井 伸治（鳥取県知事/手話を広める知事の会会長）※欠席
星 香里（公益財団法人日本オリンピック委員会常務理事）
森 和之（公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会会長）
山内 雅喜（公益財団法人ヤマト福祉財団理事長）

〇オブザーバー

清水 俊二郎（東京都スポーツ推進本部スポーツ総合推進部長）

〇事務局

事務局長　　倉野 直紀（一般財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所所長）
事務局次長　山田 尚人(一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局長）

４．審議事項

事項①　「推進室の設置目的および推進室会議の役割」
説明者：倉野事務局長
（要旨）　東京 2025 デフリンピック等の気運を活かし、デフスポーツの恒久的な振興体制を構築するため、全日本ろうあ連盟事務局内に「デフスポーツ推進

室」を設置。本会議は、推進室の取り組みへの助言、委員間の情報共有・調整・協議を行う第三者機関的役割（年 2 回程度開催）を担う。

事項②「デフスポーツを取り巻く現状の課題」
説明者：山田事務局次長
（要旨）　運営リソース・体制：競技団体の取りまとめや国際大会派遣を担う全日本ろうあ連盟スポーツ委員会において、専従職員などの運営リソースが不足。統括団体への公的支援枠組みの確立も途上。

アスリート支援： ドーピング対策、手話通訳を伴うメンタルケア、栄養指導、データ分析等の専門人材が不足。

資金・普及： 主催大会が自治体補助金や寄付金・自己資金に大きく依存。国内・地方大会の少なさによる周知不足。

事項③「推進室の具体的な取り組み計画（4 つの基本方針）」
説明者：倉野事務局長
（要旨）　戦略・企画：ファン層獲得（アンケート調査、ファン獲得計画策定・実地テスト等）、国内開催デフ世界大会の視察・支援。

調査・研究：外国のデフスポーツ推進体制の調査・ヒアリング・報告書作成（2027 年度末最終報告）。

体制・構築計画：競技団体（デフ/非デフ）へのヒアリングを通じた課題抽出と体制構築計画の策定。

資金獲得： 企業・団体へのヒアリングを通じた協賛モデル・収益構造の検討。

事項④ 「報告事項」
説明者：山田事務局次長
（要旨）2026 年度スポーツ委員会の取り組み：第 60 回全国ろうあ者スポーツ大会（佐賀県/9 月・11 月）、第 45 回全国ろうあ者冬季体育大会（長野県/2 月開催済）、国際大会への選手団派遣手続き、啓発普及事業等の推進。

群馬県手話実況中継実証実験：2029 年「湯けむり国スポ・全スポぐんま」での手話実況中継導入に向け、養成研修修了者や地元手話通訳者を起用し、公式 YouTube チャンネルで実証実験（計 3 回）を実施中。

５.意見交換

◯河合委員

・まず、この推進室会議が開催されたことは大変喜ばしいことと思っている。昨年の東京 2025 デフリンピックの開催もあり、皆様の普及のご尽力によるものと受け止めている。

・スポーツ庁としても、日本パラスポーツ協会を通じて全日本ろうあ連盟に、東京大会の手応えや成果をしっかりと繋いでいけるよう、支援を続けながらデフスポーツの普及振興に繋がっていくようにと考えている。

・その際、改めてしっかりと計画を立て、それを戦略的かつ実行可能なものとし、着実に組織体制として報告・推進していく体制を万全にしていただくことを改めてお願いしたい。その上で、先ほど報告があった様々な課題に対する解決策を、皆さんと意見交換しながら進めていく段階ではないかと思っている。

・これまでのご説明をお聞きしていて改めて思ったが、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会とこのデフスポーツ推進室のしっかりとしたすみ分けや連携の度合いを明確にすること、そして今後の方針をこの会議で決めるべきことなのか、あるいは第三者的な位置づけとして単なるアドバイスに留まるのか、そのあたりが明確になっていた方が、この会議の目的や役割がより明確になり、実施主体や実質性が高まっていくのではないかと感じている。

・引き続き、我々もしっかりと皆様と協力しながら進んでまいりたい。

◯星委員

・昨年のデフリンピックの成功により、デフスポーツの認知度や気運が高まったことは間違いないと思っている。

・レガシーを継承していくことが非常に重要で、その一つとしてこの推進室の設置があるのだと思う。先ほど現状の課題の説明があったが、レガシーの受け皿となる全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の組織基盤強化が非常に重要になると思っている。

・将来的に目指すところとして、日本パラリンピック委員会の横に全日本ろうあ連盟スポーツ委員会が並び、その下に各デフスポーツ競技団体様が加盟するというようなラインができていくことが、国際パラリンピック委員会および国際ろう者スポーツ委員会の関係から見ても妥当なのかなと思う。

・めざす姿を念頭に置きながら活動していくことが重要ではないかと思う。今後、都内などでも各デフスポーツ大会が予定されているようなので、そういった機会を捉えて理解が進むことを期待している。

◯森委員

・いよいよ新しいステージに向けた一歩だと思っている。私どももこれまで JPSA・JPC として、スポーツ庁の指導のもと、デフスポーツの様々な事業について微力ながらお手伝いをさせて頂いてきた。

・推進室の取り組み・方針・スケジュールを伺って、大変思い切ったというか、限られた時間の中でこれだけのことを成し遂げようという、非常にチャレンジングな方針だと思っている。

・今後、将来のデフスポーツに対する取り組みを進めていくと思うが、河合長官からもお話があったように、デフスポーツ推進室とこれまで実務を行ってきたスポーツ委員会における責任や役

割分担について、確認させて頂きたい。

・これから様々な計画を進めていく一方で、現在進行形の活動・事業が色々あると思う。その時に現在のスポーツ委員会の機能・活動は今まで通りなのか、あるいは内容によって推進室と手分けをしていくのか。この具体的な取り組みを進めるのは、大変なエネルギーと労力が必要。

・これを実行するにあたってどういうメンバー構成でやるのか。デフスポーツ推進室という新しいものができる一方で、実際にはスポーツ委員会が兼務してやるのか。このあたりの現実的な対応によって、これから予定していることができるかどうか大きく変わってくるのかと思う。

・私どもも設立してから 60 年余り経つが、その間を振り返ってみると、やはり統括団体と加盟する競技団体が密なコミュニケーションをして、お互いを理解していかないと物事は成し得ないのかなと思う。

・そういう意味で、この取り組みの中に何度も出てくるデフ競技団体等へのヒアリングというのが最も大切なのではないかと思う。各デフ競技団体が何を考え、どこまで準備しているのかによって、デフスポーツ全体の活動の規模が規定されてくる。言い換えれば、デフスポーツ推進室がやろうとしていることを各デフ競技団体が十分理解し、協力していくことが大変大事だと思う。

・最後にひとつ申し上げたいことは、これからどういう活動を展開するにしても、スポーツ庁を中心としたサポートが大きな基礎になる。そのサポートをしっかりと受けていくためには、統括団体も加盟するデフ競技団体自身も、国民から求められているコンプライアンスやガバナンスをしっかりと確立していかないと、絵に描いた餅になってしまう恐れがある。

・これを準備していくということは大変な覚悟が必要。その覚悟を持って、上に立つスポーツ委員会とデフスポーツ推進室がしっかりと目的を共有して事にあたるということが大変大事だと思い、アドバイスをさせていただいた。

◯大日方委員

・皆さんがお話しされている言葉と重複するところもあるかと思うのが、お話しさせていただく。いわゆる障害当事者団体として連盟が活動してきて、その中にスポーツの分野としてスポーツ委員会がある、と理解しているが、今回スポーツ委員会とは別にデフスポーツ推進室を立ち上げたということで、両者の役割分担が本当に明確になっているかがポイントだと思う。スポーツ委員会としてはこれまでの競技団体統括の活動がある中で、デフスポーツ推進室としてどのようなすみ分けをしていくのか。我々推進室会議はあくまでもアドバイザーの役割であり、決定していくのは連盟。

・資料 2 を拝見し、4 つの取組みはどれも大事なものだが、4 つすべて同時に行うのは難しい。優先順位をつけるとしたらどれなのかという点が気になった。2026～2027 年度で盛りだくさんの計画となっているが、競技団体が今何を考えているのか、現在の状況をしっかりと認識した上で、将来的に何をめざしたいのか、そして競技団体としてそこで何ができるのか。もう少しヒアリングなどを重ねて項目立てて整理されていったら良いのではないかと感じた。そしてまわりの企業や自治体との意見交換、というのが優先順位が高いのではないかと思う。

◯亀澤委員

・改めまして、昨年の東京 2025 デフリンピックでは応援ありがとうございました。皆様のおかげで大会も成功したし、私自身も団体戦で結果を残すことができた。本当に嬉しく思っている。

・今回新しく立ち上げられた推進室だが、デフアスリートである私にとってもたくさんの課題を抱えていると感じる。
・資料を見ると、一般の皆様から見たら課題がまとまりすぎていて、「何が本当の課題なのか」「デフアスリートにとって何が足りないのか」が見えにくい部分があると感じた。今回何が大切なのか、そして選手として今何が求められているのかを明確にしていただければ、協力できるポイントが見えてくるのかと思う。
・アスリートの立場から一番困っている課題としては、「練習環境がない」「スポンサーがなかなかつかない」「交流の場がない」ということ。オリンピック・パラリンピックの選手同士は交流の機会が多いと思うが、デフアスリートは別枠になっているような状況がある。もっと、オリパラの選手と一緒に大会やイベントに参加したり取り組んだりするような機会が増えれば、選手たちにとっても良いのではないかと感じている。

○石原委員
・デフリンピックでは、筑波技術大学全体でも盛り上がった。デフアスリートとして参加した学生やボランティアとして参加学生たちにとって非常に教育効果が高かったと思う。学生たちがその体験を持って社会に出ていく時の自信につながったと実感している。
・デフリンピック運営委員会に委員で加わったときは、これはコンプライアンス委員会かという疑問も持っていたが、今回の会議はデフスポーツの振興、手話言語という共通点の下、課題解決に向けてデフの世界に閉じこもることなく他団体とも連携しながら開かれた形で進んでいく、非常に良い取り組みだと感じている。

○山内委員
・デフリンピックで盛り上がった気運を継続する形でデフスポーツ推進室が立ち上がったのは大変良いことだと思うし、その一員に加われることを嬉しく光栄に思っている。
・私なりの理解を申し上げると、スポーツ委員会は実際の大会運営や競技団体の統括を担い、デフスポーツ推進室はどちらかというと環境づくり。世の中の皆様にもっと認知してもらい、愛され、応援してもらえる環境、デフアスリートが安心して活躍できる環境を作る役割なのかなと認識した。そこに大きな役割の違いがあるように思われる。
・ですから、4 つの具体的な計画のうち、特に方針①、方針②、方針④が推進室の役割に当たるのではないかと感じる。方針③はスポーツ委員会との切り分けを少し整理する必要があるかもしれない。
・ファンを作り、認知を広げ、企業からの支援や国からの公的支援を取り付けていく、そうした環境づくりを推進室が担うことで、結果的にデフスポーツ全体が良い方向に向かっていくのではないかと思う。特に企業からの支援獲得に向けたモデルづくりやサポーターの仕組みづくりなど、環境整備の面が重要だと考えている。

○河原委員
・全日本ろうあ連盟の中にスポーツ委員会があるという形で、これまで連盟はデフスポーツに取り組んできた。最近ではデフリンピックをはじめ各デフ競技団体において、以前と比べても活動の幅が広がり、陸上競技団体のように自ら世界選手権を開催するような力もついた団体も出てきた。社会状況も大きく変わったと感じている。

・ 従来のスポーツ委員会という形だけで実施していくことが果たして妥当かどうか、改めて考え直しているところである。今後のデフスポーツのあるべき姿や体制づくりについて、皆様のご意見を頂戴しながら良い形を構築していきたいと考えている。本日いただいたご意見を連盟として重く受け止めて、あるべき組織体制の構築に活かしたい。

◯山田事務局次長

・現在、私は全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の事務局長を担っており、各デフ競技団体からの相談対応や、デフリンピック等の国際大会への選手派遣・同行業務などを主な仕事として行っている。

・現在のスポーツ委員会の体制は委員 6 名、職員 3 名の計 9 名体制で運営しているが、昨年のデフリンピック開催を経て、スポーツ委員会に求められる社会的役割が大きく変わったと実感している。皆様からのご意見を頂きながら、今後の運営のあり方についてさらに検討していきたい。

◯清水オブザーバー

・今年 3 月まで 4 年間デフリンピックの準備・運営に携わってきた関係で、本日オブザーバーとして出席させていただいた。東京都としても、一過性のイベントとして終わらせるのではなく、しっかりとレガシーを作り、将来にわたって日本開催が成功だったと言われるように繋げていきたいと思っている。そういう意味でも、今回のデフスポーツ振興に向けた様々な取り組みに、大会の経験を上手く活かしていけると良いと考えている。

・ファン層獲得に関しては、デフリンピックに向けた取り組みを通じて、当初都内の認知度が 10.4%だったのが、約 70%と認知度が大きく向上した。きこえない人・きこえにくい人だけでなく、きこえる人も巻き込んでファンを獲得していく取り組みが重要。特に子どもたちへの啓発や、保護者と一緒に観戦に行くよう取り組んだことも効果的だった。

・組織体制についても、現状は非常に脆弱であるというご指摘もあった。デフリンピックでも、本来は各デフ競技団体が主体となって競技運営を行っていくべきところだが、体制的に厳しい部分もあり、きこえる側の競技団体との連携・ご協力をいただいた。この関係性を今後活かしていくことが大切かと思う。

・コンプライアンスやガバナンスについては、公的資金が入る以上、不可欠な要素であると思う。デフリンピックでは、企業の CSR 活動として協賛をいただいたと思う。今後、デフリンピックの魅力をいかに伝えて共感を得るかが重要になる。

（久松室長）

・約 20 年前に全日本ろうあ連盟の中にスポーツ委員会が設立された。かつては、日本ろう者体育協会という独立組織があったが、財政面や人材面の課題から連盟内にスポーツ委員会として組み込まれた経緯がある。それ以降、大会開催や日本選手団の派遣といった実務はスポーツ委員会が中心となって担ってきた。

・デフリンピックの成功をきっかけに、連盟内部でも将来的な組織のあり方や独立性についても様々な意見が出ている。スポーツ委員会が従来の大会運営・派遣等の実務を担い、デフスポーツ推進室がデフスポーツ全体の環境整備や組織強化、将来像を議論する場として機能するよう、役割分担と関係性を整理・構築していきたい。

・2 つ目は、デフリンピックは東京都の協力をいただき、成功したことに改めて感謝したい。連盟

とスポーツ行政、民間団体が一体となって取り組めたことが大きな大きな成果だったと思う。
今後、全日本ろうあ連盟が持つ障害福祉のネットワークとスポーツ振興を融合させ、今後のデフスポーツの基盤・制度作りに活かしていきたいと考える。本日の会議内容を踏まえ、さらに内部で協議を重ねていくので、また追加のご意見などがありましたら、事務局までいただきたい。

以上